

## 日本博物学史覚え書 XIII

磯野直秀

Notes on Natural History in Japan (XIII)

Naohide ISONO

### 1 『草花図譜』：享保・元文頃に描かれた園芸植物図説

東京国立博物館（東博）資料館に『草花図譜』（和1033, 1冊）という彩色図譜がある。草木を彩色図で描き、注記を付した筆写本だが、図はどうみても上手とは言えないし、ほとんどの図で葉の色が黄色く変色してしまっている。また、著者の名も、作成年も記されていない。したがって、最初はあまり価値のある資料と思えなかったが、注記を読んでもみると、なかなか興味深い資料だとわかったので、紹介しておきたい。

描かれているのは127品、その大半が園芸植物である。全品に比較的長い注記があり、形状の特徴や花期のほかに、栽培上の注意や出所・来歴などが記されている。注記は悪文でわかりにくいのが、幾つか例を挙げる。

①「白地榆 白われもこうハ当年の新花。此たね（注1）外になし。花、九月末より咲初、十月末に至、霜枯たるを干て置ニ色へんぜず [変ぜず]、生たるごとく冬中の立花に用て、百日紅 [いまの千日紅らしい] にまされり。くきかたくして、年をこしても花色替る事なし。撰州に出る。売店ニハ未ダなし。秘花也」

この注記が示すとおり、乾燥させて今でいうドライフラワーとし、立花材料として使われていた。『広益地錦抄』（1719刊）も、普通の赤いワレモコウで同じことを記している。

②「時斗草 ……今ぼろんかつらと名ス。とけい草は近年の名花、享保五子年 [1720]、阿蘭陀国より来ル。古来、秀吉公御治世ニ壺本渡ル。寒気ニ痛ム事不知【に】、年を不越して枯ル。唐土ニモたね少ク、葉草也。今度三本来ル。壺本は薩摩殿長崎にて調べ [購入し]、もふ式本ハ大坂江与力調べ来ル。天満野田屋四郎兵衛所持、卯年 [享保8年] 初テ花咲、壺本ハ切

---

〒232-0066 横浜市南区六ツ川3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Aug.10, 2003]

本稿では、引用文の漢字と仮名に現行字体を用い、濁点・句読点・振仮名を適宜加えた。引用文中の（ ）は原注、〈 〉は原本の振仮名、□は判読できなかった字、【 】は脱字・送り仮名の補足、[ ]は磯野による注あるいは補足である。仮名が続くとき、単語に下線を付して読みやすくした場合もある。

テ挿木ニス……享保九【年】三月廿一日、大坂大火の節、此種たへて〔絶えて〕なし。同年五月、又天満ニ出……」

伊藤伊兵衛政武著『地錦抄附録』には「時計草、長崎にてぼろんかづらといふ。享保八年に来る」とあるが、上の注記によると長崎には享保5年に持ち渡られているから、享保8年は江戸に入った年だろう（注2）。

この例のように渡来年を記すのは、「毛麟花（もりん花）、元和元年〔1615〕唐船ニテ来ル」「三段花、延宝三年〔1675〕唐船ニテ来ル」「仏想花〔ハイビスカス〕、延宝年中〔1673～81〕唐船ニテ来ル」「竜腦木、享保九辰〔1724〕、朝鮮より来ル」などで、年記は欠くが「薩摩・蝦夷・朝鮮」などの出所が示されている例もいくつかある。

- ③「連玉花〔レダマ〕 れだまハ上古ノ上花也。今世多。近年えにすた〔エニシダ〕<sup>いでき</sup>出来て、すたれり。古来ハ秘花とす。えにすたより木もふとく、花もつぶさ〔細かく〕にして、はるかにおとれり。さし木・植替、なりがたし。さし木にならひ、春植かへて、一本もつかず。えにすた同然なり」

レダマもエニシダもマメ科でヨーロッパ原産だが、『地錦抄附録』によると、レダマは正保～万治年間（1644～61）、エニシダは遅れて延宝年間（1673～81）に渡来したらしい。

- ④「二重透<sup>ふたすかし</sup>ハ、一名かさね山替り物。ふたすかしハ新花之上花也。花本紅、少紫ばみ、淡紅也。花二重ニかさなりて咲、四月開ク。卯ノ年より出。ゆりの新花、少し。花中に黄のはきかけ、しぼりのごとく、多入」

スカシユリの八重咲が出現していたとわかる。別項に「帆掛透」があるが、これは6枚の花弁のほかに、萼の個所から細長い花びら1枚が帆のように立ち上がる変異。「金ざい透」は雄しべの数本が矢筈型になった変異で、後の「鳳凰閣百合」（本報第3節の資料①⑥⑧に所収）と同品と思われる。

- ⑤「車軸 しやじくハ花紫、小草也。夏咲。西国にては古キ花ニて、用ルこと多【か】らず。此たね、近年江戸へ来りて、染井某、半辺蓮と云ふらし、大にはやり、上花ともてはやす。半辺れんとハ大に違あり。廿ヶ年以前より京都ニ出て、しやじくと云ならハせり。上花ニハあらず」

シャジクソウは信州に産するマメ科の草で、葉も花も車輪を半分にしたような形なのが名の由来。今は園芸とは無縁だが、この文のように、かつて流行したこともあるらしい。

なお、文中に「染井某」とあるが、この表現が本書には十数回現われる。その記載のある草花は『地錦抄』シリーズに取り上げられているので、「染井某」は江戸染井の植木屋でその著者伊藤伊兵衛三之丞・政武父子であろう。⑥⑦も「染井」が出る例。

- ⑥「本小倉 おぐらせんのふけ〔小倉仙翁花〕ハ古来より古キ花にて正真を知ル人少シ。〔ある人は〕紅松本の色良き也と云、〔別の方は〕葉の縁<sup>へ</sup>り黒キなる也と云——まぢまぢにして定メがたし。近年染井某、葉ニ切込有りて図のごとしの花、真也と。近江ノ国より出たりと云。享保八年、在番之節、此事を近江ノ国泊り宿之時、所〔土地〕の人【に】聞、□□<sup>し</sup>不知。撰州に一年在番にて此事を問ニ、一人として不知。又京都ニ此事を尋ぬれど不知。何レ

を以、真とすべし哉」

わかりにくい文章だが、著者についての手掛かりが記されている。上文のように、享保8年(1723)から翌9年にかけて著者は大坂に「在番」しているので、身分はわからないが、幕臣らしいのである(注3)。享保8年は卯年、9年は辰年だが、本書には、「卯年の新花」「辰の新花」と記した草花が幾つかあり、これは著者の在坂中の記事に違いない。ほかにも、②に挙げられている享保9年3月21日の大坂大火、「竜腦木……享保九辰、朝鮮より来ル」などの注記、大坂の植木屋に言及した記事などが多く、本図譜は著者の大坂滞在中の見聞を軸にして作成されたと考えられる。本図譜の最終項に「玉蔓草たまつるそうハ元文申五年(1740)夏、摂州近山より大坂高津植木や吉助方へ出ル……」との注記があり、これ以降の年記は無い。したがって、本書は享保8年頃から元文年間(1736~41)頃までに作成されたとみてよいだろう。

- ⑦「星岩石[星岩石蘭] ほしがんせきハ黄おうけい [黄蕙?] の替也。上花とすべし。世にまれなり。形同じくして、葉白き星入、見事なる也。たとふ物なし。花は黄けいと同じ。近年の者にして、染井の秘花也」(注4)

「葉白き星入」、つまり緑色の葉に白い斑点が散在しているとあるように、これは葉が斑入ふいりの植物。次例もこれに類した変異体である。

- ⑧「白葉沈丁花 白葉ぢんちやうけハ近年の上物也。形、常のぢんち花ト同じ。葉の辺りを雪白にてふどり。葉濃い青に白ク辺り取たる所、まさき辺り取、もちの木辺り取など、およぶ事にあらず。白葉の上物と云り。この種、世に少し。江戸に二三本ならでハなし[二三本しかない]。家花：「家花」は自家で出現した花の意味か。

このジンチョウゲは葉の縁が白くなっている変異体ふくりん(覆輪)である。本書に所収されている127品の大半は園芸植物だが、そのなかで葉の斑入ふいりや覆輪・爪白つましろ(注5)をもつ品が、前項の星岩石、この白葉沈丁花のほかに、嶋ぎぼうし・白葉大山しきみ榕・爪白しきみびびね・嶋竹・嶋菖蒲などあって合計11品に達する。斑入などの奇品愛好熱は享保の頃から高まったといわれるが、次節の『草木弄葩抄』(享保20年=1735刊)とともに、それを裏付ける資料である(注6)。

『草木奇品家雅見』(1827刊)によれば、江戸四谷の永島某が斑入などの変異品を愛玩し、奇品愛好を広めたという(注7)。その永島が見出したという「大覆輪沈丁花」の図が上記の『草木奇品家雅見』に所収されているが、これは本項の「白葉沈丁花」と同品と思われる。したがって、『草花図譜』の著者が永島自身か、その周辺の人物の可能性もある。

\* \* \* \*

以上をまとめると、以下のようになる。

- (1) 本書は享保8年(1723)頃から元文5年(1740)頃にわたって執筆された園芸植物図説である。この頃多くの園芸植物を扱った図譜としては、江戸染井の伊藤伊兵衛政武が出版した『増補地錦抄』(宝永7年=1710刊)、『広益地錦抄』(享保4年=1719刊)、『地錦抄附録』(享保18年=1733刊)くらいしか知られておらず、何にせよ新出資料は意味がある。しかも、『地錦抄』シリーズが江戸の草木を中心としているのに対して、本書は数少ない大坂の園芸資料であり、関東と関西を比較する意味でも有意義な資料と思われる。

- (2) 斑入植物を11品も図示しているのが注目される。この時期かなりの数の斑入植物に言及しているのは、『地錦抄』のほかは、『草木弄葩抄』(享保20年=1735刊、ただし、図はない)しか管見に入っていない(→注6)。
- (3) 本書の著者は不明だが、⑥の記述より、享保8～9年(1723～24)に大坂に在番した幕臣と考えられる。また、「立金花」の項に「摂州ニ出ル。此たね〔種類〕江戸中ハ予ヒロメ広ル。今ハ江戸ニ多シ」とあるので、江戸の園芸界に関係が深い人物らしい。⑧で記したように、斑入植物との関連から、江戸の「永島」と関連する人物の可能性もある。

(注1) この「たね」は種子を指すのではなく、種類の意味である。本書で出る「たね」「種」はすべて同じ使い方のようである。

(注2) 『地錦抄附録』(享保18年=1733刊)巻3巻末の「唐土より渡り来る花木草花」は、園芸植物の渡来年を記した資料としてしばしば利用されるが、この時計草の例が示すように、日本への渡来というより江戸への到来年の記録と考える方が適切と思う。

(注3) この図譜には阿部喜任(1805～70)の序文があり、それによると本書は同家に古くから伝わったもので、喜任は祖先の阿部照任(1667頃～1753)の著作と考えていたようである。しかし、享保8～9年に照任は江戸にいて、幕府の採薬行に加わったり、著作『上言本草』を幕府に献上したりしている。また、照任は幕臣でもない(磯野直秀、阿部照任の上申書と関連資料、慶應義塾大学日吉紀要・自然科学、25号、1999年)。したがって大坂に在番した筈はなく、『草花図譜』は照任の著作でないことが明らかである。

(注4) これと同一品の図と解説が、伊藤伊兵衛政武著『広益地錦抄』(1719刊)巻8にある。

(注5) 覆輪は葉の縁の色が変わったもの、爪白は葉の先端部の色が変わったもの。

(注6) これまで、斑入植物の流行は江戸で始まったようにいわれてきた。しかし、江戸で出版された『広益地錦抄』で9品、『地錦抄附録』で6品の斑入植物しか所収していないのに、より多くの斑入品を取り上げている本書および『草木弄葩抄』がいずれも大坂と関連することを考えると、関西が起源かもしれない。

(注7) 『草木奇品家雅見』には、永島某は鏝付きの瀬戸物植木鉢を初めて作らせた人物とも記されている。『草花図譜』には、わずか1件にすぎないが、「奈古蘭」に植木鉢が描かれている。これは、『地錦抄附録』(1733刊)に2点だけ植木鉢が描かれているのと並んで、園芸書に載せられた植木鉢の図としてもっとも古い例の一つといえる。

## 2 『草木弄葩抄』

前節の『草花図譜』と同じ頃、園芸書が2点刊行されている。一つは伊藤伊兵衛政武著『地錦抄附録』(享保18年=1733刊)で、地錦抄シリーズの掉尾を飾る有名な図譜である。他の一つは『草木弄葩抄』。前者と対照的にまったく知られていないが、興味深い内容をもち、前節の『草花図譜』と同じく斑入植物を数多く取り上げているので、概要を記しておきたい。

本書は刊本だが、『国書総目録』には国会図書館の1点(特1-2485, 1冊)しか採録されていない。1巻1冊, 全44丁, 構成は序・凡例・本文で, 刊記は無い。序は漢文, 凡例と本文は平仮名交じり文, 図は無い。題箋題は「草木弄葩抄」, 序は「草木弄葩抄序」の題をもち, 序の末尾は「享保乙卯〔20年=1735〕秋八月浪華八新人菊池成胤」で, この菊池が著者らしいが, 断定はできない。また, 凡例の末項に「此書にのせたる草木の花葉実, 其かたち其いろをさいしき〔彩色〕して, 下巻木の部ののちに附す」とあり, 現存国会図書館本はその上巻に当たるが, 下巻も出版されたか, 出版されずに上巻だけで終わったのか, 不明である(注1)。

上述のように現存本は上巻で, 全209項。同一項中に数品を取り上げることもあるので, 品数はこれよりかなり多い。見出しは和名で, 漢名を併記する場合もある。その各品ごとに形状や花期・異名を記すが, 渡来年などの来歴には触れない。初出と思われる種類もあり, また斑入などの異品を挙げるのが少なくない。以下, いくつかの事例を示す。

- ①「君かけ草 花のかたち風鈴のごとく, 色雪白, 至極ちいさし。しのだち六ツ七ツふさ咲, 花のあと実を結ぶ。夏の末よりあかくてり〔赤く照り〕, さんごじゅ〔珊瑚樹〕のごとく見事なり。葉, なるこゆりの葉に似てうつくしく, 大葉なり……」

これは現在のスズラン(鈴蘭)で, その初出。当時は君影草(現在の別名)と呼ばれており, 「鈴蘭」はいまのカキランだったという。従来, 君影草の初出は安永5年(1776)刊の『本草正譌』とされていたようだが, 本書の方が40年ほど早い。また, 前節の『草花図譜』においても, 「きみかけ草」の名でスズランが取り上げられている。

- ②「葉ぼたん 葉のいろ, るり・紫・紅のうつり有。花のかたち, 大こんの花のごとく, 黄色なり。葉より立のびてさく。又, とう菜とも, しょかつ草〔諸葛草?〕とも, くんはい草〔軍配草か〕共いふ」

ハボタン(葉牡丹)の名の初出と思われる。ハボタンはキャベツの変種, 今までは安永7年(1778)刊の『本草正々譌』に初めて名が出るといわれていたが, 本書に登場するほか, 寛保元年(1741)にオランダ通詞吉雄藤三郎が作成した『辛酉阿蘭陀本草之内御用二付承合候和解』中にも「大坂花屋辺ニ葉牡丹ト名付申候」の記述がある。なお, 「諸葛草」は諸葛菜と思われるが, この名はハボタンを指す場合とムラサキハナナ(通称ハナダイコン)を指す場合がある。

- ③「松本 花に色数多し。紫松本ハ花のいろ, うすむらさき也。唐錦松本ハ本紅に白のかすりしげし……」

冒頭部だけ引用したが, この松本(ナデシコ科のセンノウの類)の項では20ほどの品種を挙げる。花色・形状の異なる品を列挙しているのは, このほかに桜草(9品種, 以下を含めて概数)・あやめ(8)・あざみ(15)・えびね(17)・おもと(7)・阿蘭陀石竹(30)・なでしこ(22)・桔梗(11)・花菖蒲(10)・かきつばた(12)・唐蓮(11)・すすき(10)などで, それぞれの流行を物語っている。

- ④「あざみ 漢名薊 花に数多し……天竺あざみといふものあり。朝鮮あざみともいふ。花葉共に大なり。花のいろ, るり紫。葉つねのあざみよりハきれふかく, 平江帯〈ひこたい〉

の葉を見るごとし。草だち、かく別大【き】く、めをおどろかせり。また、ことし黄色のあざみといふを、はじめて見る。花のいろ、かはりたるといふばかりにて、このむにたらず……」

注記の中ほどを省略したが、花の色変わりなどを15品ほど挙げている。その最後に出る上記の「黄色のあざみ」とは何だろうか。

- ⑤ 「おもと 葉にかはり [変わり], あまたあり。白に青きうつり有, ふちしろあり, 黄すじあり, 虎斑あり, 千すじ有, 中に一すじ入も有。葉一まいに青と白と, かた葉わけあり」

「青」は、緑色の意味。ここには、7品の斑<sup>ふがわ</sup>変わりが挙げられている。「ふちしろ」は「縁白」で、いわゆる覆輪(注2)。「かた葉わけ」は葉の中央を境にして、色が異なっていることだろう。なお、享保4年(1719)刊の『広益地錦抄』には、「覆輪おもと……葉のまわり白く、銀のふくりん[覆輪]をとりたるごとくなり。古来、筋おもと、とらふおもとというありて、葉の中にまだらなる白ふありて、夏秋しろく、ふゆはうす白くかわる。覆輪ハ葉のへり斗<sup>ばかり</sup>白く、夏冬かはず、銀白色にてめずらしく、ながめ有」と記されている。

- ⑥ 「すすき 漢名芒 数多し。葉に白く矢はづ(矢筈)入あり, 虎斑<sup>とらふ</sup>入あり, はくますすすきといふ。葉の中に白すじ入も有, とおしといふ。冬すすきを有原<sup>ありはら</sup>すすきといふ。葉に青と白と入を, 間道茅(しすすき)といふ。寒すすきといふハ、葉のふち白し。かけ寒すすきといふハ葉白く青きすじ少し有。四季共に葉あり, 葉ほそきを, いとすすきといふ。一種, 株づくり, 四季ともに葉のかはらぬあり。尺なく[一尺に満たず], 至極見事なり, 一もとすすきといふ。又, ますほのすすきといふもの有……」

いろいろな変異が挙げられており、多くは斑入品である。「はくますすすき」とあるのは「白熊<sup>はくま</sup>すすき」だろうか。「白熊」はヤク(ウシ科)の尾の白い毛で、仏子や檜の飾りに用いていた。

\* \* \* \*

平和が到来した江戸時代には園芸が盛んになったが、17世紀には椿・桜・梅・カエデ・ツツジなどの樹木が主人公で、草本性植物に目が向けられはじめるのは17世紀の後半になってからであった。それも、初めは菊や牡丹など、元をただせば中国に由来する種類が中心であったが、18世紀に入る頃から、百合・桜草・花菖蒲・アザミ・エビネ・オモトなど、本邦産の野草の園芸品化が進みはじめる。つまり、園芸の方向が大きく転換するのである。『花壇綱目』(天和元年=1681刊)を最初として、『花壇地錦抄』(元禄8年=1795刊)、『花譜』(元禄11年=1698刊)、『草花絵前集』(元禄12年=1699年刊)、『増補地錦抄』(宝永7年=1710刊)、『広益地錦抄』(享保4年=1719刊)、『地錦抄附録』(享保18年=1733刊)と、広域の園芸品を対象とする園芸書の刊行が続くのは、この転換に相応するものであったと考えられる。

また、斑入品の愛玩が始まるのは享保時代らしいが、これも新たな動きである。本書では⑤⑥の2例に斑入などの突然変異体をいくつも挙げるが、これが大きな特色で、15項ほどで斑入品に言及しており、その総数は30余品に達する。前節の『草花図譜』と同じ時期に記され、ともに大坂の園芸品が主体となっているので、共通した品も幾つかある。ただし、総数だけ比較

すると、『草木弄葩抄』が所収する斑入品は『草花図譜』の11品よりはるかに多い。ちなみに、『地錦抄』シリーズ所収の斑入品は、『花壇地錦抄』4品、『増補地錦抄』6品(増補分)、『広益地錦抄』9品、『地錦抄附録』6品である。

このような観点から考えると、前節の『草花図譜』と本節の『草木弄葩抄』は大坂の園芸品中心であること、斑入植物を多く所収することの2点において、上記のすでに名高い園芸書とならんで有用な資料ではないかと思われる。

(注1)『[享保以後]大阪出版書籍目録』(大阪図書出版業組合編、龍溪書舎、1998年：元版、1936年)には、本書も本著者も所収されていない。

(注2)覆輪は葉の縁に沿った部分が白や黄色に変わったもの。

### 3 百合の図譜

最近ある必要から百合の図譜を集中的に調べたところ、いままで著者不明とされてきた資料の著者が判明したり、また数点は転写・抄写の関係が明らかになったので、ここで要点をまとめておきたい。( )内は所蔵館・請求記号・冊数、また本節に示した資料は、断らないかぎり筆写の彩色図譜である。

①『百合花集』(国会図書館、辰-15、3冊)、飯室庄左衛門著、自筆本、全63品。

書名は題箋題による。内題・目録・序・跋・奥書なし。本文は1頁1品で、品名のほか、ときに産地を示すが、形状や来歴の注記は無い。類似品をある程度まとめているが、全体としてはかなり雑多である。旧蔵者識語：「右百合花集三卷、奥村残跡庵珍藏」(注1)。

これまで著者不明とされてきたが、筆跡から幕臣飯室庄左衛門(注2)の自筆本と判明した。主著の一つである『草花図譜』の外編と考えられる(注3)。全78図だが重複が多く、それを除くと63品。

②『百合三十四種図』(国会図書館、か-31、1冊)、①の転写本、転写者不明、全35品。

目録あり。目録題は『百合図』。序・跋なし。本文：1頁1品で、品名だけを記し、注記は無い。奥書：「弘化二年(1845)五月、椿園氏蔵本以写之／勝村氏」。

品名および図柄の比較から、35図のうち32は①の転写であった。ただし、配列はまったく異なる。①と同じく、奥村残跡庵旧蔵。

③『百合譜』(国会図書館、WB9-1、1冊)、坂本浩然著、自筆本、全30品。

書名は扉題による。目録・序・跋・奥書なし。用紙の柱記に「葦溪蔵本」と刷られている。葦溪は坂本浩然の号。筆跡も同人に間違いはない(注4)。本文は1丁1品でオ面に図を描き、ウ面に注記を記す。扉の記載によると食用のユリだけを取り上げており、注記では球根の味にも触れる。

④『資生圃百合譜』、馬場大助原画、加藤竹斎転写、全40品。

伊藤圭介編『植物図説雑纂』(国会図書館、別6-9、全254冊)の冊214・215「ユリ」の項に所収されている。見事な写生図だが、図には品名を記すだけで、注記は無い(注5)。

伊藤圭介とその孫伊藤篤太郎の注記によると、馬場大助（注6）の描いた原本を横浜在住の園芸家クラマー（C. Kramer）が入手しており、それを明治7年（1874）に圭介が借り出して、画家加藤竹斎（注7）に写させたという。『資生圃百合譜』の題は篤太郎の付したもので、原題・原本の形状・図数・作成年などは不明。序・跋があれば圭介が写したはずだが、見当たらないので本来無かったのだろう。原本の存否・所在は不明。

- ⑤ 『百合図譜』（国会図書館，か-33，2冊），行方水谿著，転写本，全101品。

序・跋なし，目録あり。書名は目録題による。目録末尾に「已上，合壹百品 行方水谿著／已上，百合壹百種／于時，明治六癸酉歲林鐘〔6月〕仲書終」「明治廿九年申十二月日／応笠木無量君之需写之，隆齋老人田島耕」と記されており，行方水谿（注8）が著者で，明治6年（1873）が執筆年と思われる。

本文は1丁1品でオ面に図を描き，ウ面に注記があり，形状や由来・産地などを記す。形状によって，「巻丹類（オニユリ），車葉類（クルマユリ），山丹類（ヒメユリ），百合類（ヤマユリ），笹百合類（ササユリ），鉄砲筒咲類（テッポウユリ），鹿子百合類（カノコユリ），夏透百合類（スカシユリ）」に分け，この順に配列している。透百合類が30品と多いのが特徴。図はやや類型的だが，特徴がよくわかる。

- ⑥ 『百合花鏡集』（東京国立博物館，和139，1冊），⑤の改変本，全96品。

内題は無く，書名は題箋題による。目録はあるが，序・跋は無い。本文の様式は⑤とまったく同じで，所収品も大半が共通し，⑤の転写を基礎にしていることが明らか。巻丹類～鹿子百合類は所収品名も配列もほぼ同じだが，転写者による追加品が多少ある。一方，透百合類は15品と少なく，所収品・配列ともに大きく異なる。注記の文章は，要点は⑤と同じだが，全編にわたって大半が書き換えられている。

後見返しに次の識語が記されており，本資料の由来がわかる：

「此書全壹冊，紙数四十八葉，写生図九十六種アリ。花戸内山卯之吉ノ所蔵ニ係ル。明治十七年〔1884〕二月，露国園芸博覧会ニ際シ，画工山田清慶ニ命ジ謄写セシメ，以テ天産課ノ書架ニ収ム」

内山卯之吉は東京巢鴨の著名な植木屋で，多数の園芸植物図譜を所蔵していたらしい。本書もその一つで，前項で取り上げた行方水谿の『百合図譜』を転写し，自己の見聞・経験に基いて手を加えて所持していたのであろう。とくに注記は花戸としての経験がいろいろ盛り込まれているように思う。また，識語中の山田清慶は，当時博物局（現東博の遠い前身）所属の画家だった。したがって，博物局が上記卯之吉所蔵本を写させたのが本写本とわかる。

この卯之吉本を転写した別資料がある。国会図書館蔵『百合花雑記』（849-14，1冊）がそれだが，これは明治12年（1879）に卯之吉本の注記だけを転写した資料で，図は無い。所収品数は94品だが，最後の1品は後に追加されたらしく，明治12年の転写時には93品だったと思われる。因みに，追加品以外の注記は，⑥本の注記とほぼ同内容である。

- ⑦ 『百合百華図』（国会図書館，特1-2135，1冊），著者不明，無彩線画，全40品。

序・跋無し。目録があるが，目録に記されていて本文に欠ける品が少なくない。書名は目



録題による。本文は1頁1品の線画（無彩）であり、『増補地錦抄』『広益地錦抄』からの転写7点以外は写実的で、相当な腕の持ち主。注記は少ないが、形態の記述は正確。

⑧ 『長太百合図』（仮称）、内山長太郎画？、全38品。

東京国立博物館に『植物集説』（和2346、61冊）という資料集がある。明治10年代に当時の博物局が、江戸時代の草木図および新たに描かせた植物画を科別に編集したもので、冊45「百合科」に、「長太図」と記した写実的な彩色図38点が含まれている。その上部には「Lilium japonicum」などの学名が記されており、学名記入個所をあらかじめ空所にしておき、作成と同時に記入されたように思える。作成年は不明だが、品名は江戸時代で使われていたものが多く、それに学名を添えていることを考えると、明治初期であろう。ここでは一括して『長太百合図』と仮称しておく。「長太」は江戸巢鴨の植木屋内山長太郎（注9）か、その子息二代目長太郎である可能性が高い。

本書に覆輪（葉の縁が白化する）と爪白（葉の先が白化する）が計3品描かれていること、「鳳凰閣」という百合でオシベが帯化して矢筈型になっている状態が明瞭に描かれていること（①と⑥にも図があるが、矢筈型オシベがいま一つはっきりしない）を指摘しておきたい。

（注1）奥村残跡庵（1874～1919）、名は繁次郎、焼芋屋を営む。博物・食物を研究し、蔵書家でもあった。蔵書印「此ぬしいも繁」はよく知られている。

（注2）飯室庄左衛門（1789～1858?）は幕臣、名は昌<sup>まさのぶ</sup>羽、通称庄左衛門、号楽圃・千草堂。緒鞭会の一員、主著は『虫譜図説』と『草花<sup>そうか</sup>図譜』（注3報文参照）。

（注3）磯野直秀、伊藤圭介編著『植物図説雑纂』別6-9本、参考書誌研究、59号、2003年。

（注4）坂本浩然（1800～53）は紀伊藩医・画家。名は直<sup>こうねん</sup>大、通称浩然、字桜宇、号蕈溪・浩雪・香邨。桜の図譜多数のほか、キノコ類や草木の図譜をいくつも残した。→次節

（注5）注3報文参照。

（注6）馬場大助（1785～1868）は旗本、名は克昌、通称大助、字仲達、号資生・紫欄。舶来草木に関心が深く、大著『遠西舶上画譜』『群英類聚譜』を残した。

（注7）加藤竹斎はのち、東大小石川植物園所属の画家として活躍した。

（注8）行方水谿は江戸の城北に住んでいた本草家。生没年未詳。号清溪・水谿・採珍堂。ほかに、『採珍堂日摘』（安政3年＝1856刊）、『品物類聚』（安政5年刊）、『福寿草譜』、『桜草百品図』などの著作がある。

（注9）内山長太郎（1804～83）は⑥で名が出た卯之吉の兄で、兄弟揃って江戸巢鴨で植木屋を営み、名声をはせた。若くして富山侯前田利保に見込まれ、維新後は皇居の御苑や上流階級の庭園を手がけたという（川添登、東京の原風景、ちくま学芸文庫、1993年）。

#### 4 坂本浩然の自筆図譜

紀伊藩医だった坂本浩然が優れた画家だったこと、とくに桜の図譜を多く残したことは広く知られており、この「日本博物学史覚え書」でもすでにその一端を紹介してきた（注1）が、

表1 坂本浩然自筆草木図譜一覧（桜の図譜は除く）

題名	請求記号	冊数	年記／執筆時期	品数	用紙柱記	旧蔵者
国立国会図書館						
菌譜	別11-18	4冊	天保5年9月・自序	83	ナシ	田安家
菌譜二集	別11-19	2冊	天保6年冬・遠藤通序	112	葦溪蔵本*	田安家
竹譜真写	特7-174	2冊	執筆時期不明	50	ナシ	田安家
躑躅譜	特7-187	3冊	天保7年4月・自序	119	ナシ	田安家
躑躅譜	た-18	3冊	天保7年4月・自序	119	葦溪蔵本	
福寿草図譜	雑纂159**		執筆時期不明	21	ナシ	田安家
牡丹花譜	特7-216	3冊	執筆時期不明	60	ナシ	田安家
百合譜	WB9-1	3冊	執筆時期不明	30	葦溪蔵本	
琉球草花図説	特7-259	2冊	執筆時期不明	61	ナシ	田安家
琉球草木写生	特7-258	2冊	執筆時期不明	73	ナシ	田安家
東京国立博物館						
桜草勝花品	和1018	2冊	天保6年3月下旬・自序	86	ナシ	
東大総合図書館						
御薬園草木写 占稿	A00-4603	1冊	文政12～天保元年	45	ナシ	
信州草木写真 底稿	A00-4605	1冊	表紙：天保3年8月上旬	29	浩雪写真***	
草木写占底稿	A00-4604	1冊	文政12～天保元年	53	浩雪写真***	
日光奥羽草木 図占底稿	A00-4600	1冊	題箋：文政12年9月15日	54	ナシ	
琉球奇花写真 底稿	A00-4601	1冊	題箋：天保12年9月	42	ナシ	

\* 下巻のみ柱記あり。

\*\*伊藤圭介編『植物図説雑纂』（別6-9）冊159に所収。

\*\*\*粹外下方に「浩雪写真」と刷られている。

それ以後も幾つかの自筆本に出会ったので、ここでまとめておきたい。各資料の要点は表1に示したが、表に載せられなかった点を以下に記しておく。なお、表に示した資料は、用紙に浩然の号「葦溪」「浩雪」があるか、筆跡（注2）から自筆と判明したもののばかりである。

- ① 菌譜：浩然の刊本『菌譜』（天保6年秋刻，2冊，120品）の元になっただけの筆写本。全83点のうち58品が刊本と共通するが、図は多少異なる場合が多く、注記も刊本の方が整理されていて、わかりやすい。自序で、「文政13年（＝天保元年，1830）秋に信州・甲州・奥州・越後をまわり、約300品のキノコの図を描いた」旨を記す。
- ② 菌譜二集：刊本『菌譜』2冊の題箋に「木」「火」と巻次が示されているが、この「二集」の本文冒頭に「食用者 六十六品 土部」「毒菌類 六十四品 金部」とあるので、浩然は菌譜を「木火土金水……」の順で刊行する計画で、「二集」はその草稿らしい。斎藤通（注3）の序文が付されているが、この序は整版されているので、刊本二編に使う予定だったのか。なお、斎藤序のなかで、浩然が薩摩藩の曾占春から本草を学んだと記されている。
- ③ 竹譜真写：序跋無く、筆者名・執筆年も書かれていない。注記は漢書の引用が多い。伊藤圭介が「奇竹最多シト雖<sup>イエ</sup>ドモ、怪シムベキモノ亦尠カラズ」との識語を残している。

- ④ 躑躅譜：特7-187本と、た-18本の2本があるが、所収品は全く同じ。ただし、注記が多少異なる品もある。同名の国会図書館849-17本はその転写本だが、品数は89にすぎず、図も劣る。転写者は不明。
- ⑤ 福寿草図譜：伊藤圭介編『植物図説雑纂』冊159に所収されている。序跋は無し。筆者名・執筆年も記されていない。注記が簡単すぎるからか、伊藤圭介は明治12年（1879）1月に、小石川植物園園丁の内山富次郎に形状や産地・由来などを補わせた。図に貼付した小紙片に記されているのが、その富次郎の補注である。富次郎は、巢鴨の著名な植木屋内山長太郎か、その弟卯之吉の親族と思われる。
- ⑥ 牡丹花譜：序跋が無く、筆者名・執筆年も記されていない。図には花銘を添えるだけで、注釈は無い。
- ⑦ 百合譜：本報第3節③参照。
- ⑧ 琉球草花図説：執筆者名・執筆年は無し。これは浩然の著作ではなく、田村藍水の図説『琉球産物志』全15巻＋附録3巻のうち、巻1～3所収品の約半数を転写したもの。
- ⑨ 琉球草木写生：題箋には「琉球草木写占」と書かれており、その「占」字を棒引きして消して「生」に直してあるのが現登録書名。したがって、原題名は『琉球草木写占』だったらしい。草木54品と石類19品、計73品の写生図だが、これも序跋は無く、筆者名も見当たらない。⑧と題が似ているが、『琉球産物志』の転写ではない。ただし、草木の実写か、他本の摸写かは不明。品名と産地を記すだけで、注釈は無い。国会図書館蔵の『流虬属嶋草木写占』（W392-8、1冊）は草木38・石類22、計60品の図説で、うち55品は『琉球草木写生』と同図。ただし、筆跡は浩然ではなく、転写本。「流虬」は琉球の意。なお、「写占」は浩然独特の用語で、「占」には「書き記す」の意味があるから、「写生」を指すらしい。
- ⑩ 桜草勝花品：書名は題箋題による。本文は86図に花銘を添えるだけで、注記は無い。桜草の花は本来5弁だが、6弁のものが数品ある。また、「極黄」の花銘をもつ黄色い桜草が描かれているが、黄花の品は他の桜草図譜で見た記憶が無い。
- ⑪ 御薬園草木写占稿ほか：東大蔵の5点はみな一次写生、つまり実物そのもののスケッチと思われる。『琉球……』以外は写生年月日を付す場合が多い。『信州……』は天保3年（1832）8月に碓氷峠・浅間山麓・戸隠などを、『日光……』では文政12年8～9月に古河・会津・日光などを回った時のものであることが、記載地名からわかる。

\* \* \* \*

坂本浩然の自筆本には、「田安府芸臺印」「猷英楼図書記」「田安文庫」の3印が捺されているものが多いが、これは田安家の旧蔵書で、表1に示すように計8点にも達する。詳細はわからないが、浩然は田安家の注文に応じて草木図譜を作成していたらしい。そして、その全点が伊藤圭介旧蔵書であり、何かの伝手<sup>うたて</sup>があつて圭介は田安家旧蔵の草木図譜類を一括して入手する機会に恵まれたのだと思われる。どういう伝手だったのか、それが何時なのか、現時点では見当がつかないが、『伊藤圭介日記』に手掛かりがあるかもしれない。

- (注1) 磯野直秀, 日本博物学史覚え書IX, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 28号, 2000年: 該当項, 天保年間の園芸書。同, 日本博物学史覚え書X, 同前, 29号, 2001年: 該当項, 坂本浩然・純沢兄弟。
- (注2) 浩然の筆跡の特徴: ①「鳥」「島」の上方部は「白」形で, その下の「一」が右に出るのが普通だが, 浩然の字は上が「自」あるいは, さらに横棒が一本多く, その上から3番目の棒が右に飛び出す。②「色」の「巴」部の縦棒を書かず, 「汜」の旁のようになる。「絶」などにも同じ癖が出る。③「黄」の中央部が「由」でなく「田」に, 下方の「ハ」が「い」になる。④「州」の左と中央が「ソ」, 右が「リ」のようになる。⑤「陰」の隣の屋根冠の下が「肆」の扁のようになる, など。
- (注3) 遠藤 通は紀伊藩の漢学者で, 奥儒者や藩校明教館督学をつとめた。名は泰通, 通称勝助, 号鶴洲・白鶴義斎・義斎。通・通克・新五右衛門とも称した。天保の飢饉を憂い, その対策をたてるために「尚齒会」を創設したことでも知られる。同藩の藩医だった坂本浩然とは当然早くから知り合っていたであろう。天保飢饉の際に遠藤が刊行した著作『救荒便覧』(1836刊) 所収の「救荒扶食」は飢饉時に利用できる野草22品の図説だが, 野草図は坂本浩然が描き, その父坂本純庵が説明を付けている。また, 浩然自身にも『救飢食品考』2冊および『拾遺救飢食品考』2冊の著作がある(東博蔵『救飢食品考』和2452本に両著を所収)。前者は野草43品, 後者は38品を図説して, 可食部や調理法などを述べている。浩然の知られざる一面といえる。

## 5 ナマズはいつから江戸に棲みついたか

いまナマズ(鯰, 鯪, 鮎; 注1)は北海道南部以南の全国に生息しているが, 江戸時代前半までは分布が限られていたらしい。というのは, 貝原益軒著『大和本草』(1709刊)に「鯪魚(ナマズ)……箱根ヨリ東ニ無<sup>ナシ</sup>之ト云」と記載されているからである。

- 江戸の町医だった神田玄泉の『日東魚譜』享保21年(1736)序本には, その関東にナマズが棲むようになった経緯を含めて, 次のように記されている(注2)。

「鯪魚……此魚, 素<sup>ナマズ</sup>関西ニ在リテ関東ニ絶テ無シ。然ルニ享保十三戊申[1728]秋九月二日, 武州大イニ洪水シテ高田川ノ水上破レ, 民屋ヲ流シ, 人馬多ク死ス。是ヨリ以来, 鮎魚<sup>ナマズ</sup>処々ニ生ズ。就中, 武州千住川ニ多ク産ス。是ヨリ前, 関東ニ有ル事ヲ曾テ聞カズ」(原漢文, 読み下し): 高田川は利根川の一支流で上野国南部を流れる。

- 斎藤月岑著『武江年表』にも同様の記事がある。

「[享保十三年]八月三十日夜より九月二日三日, 北大風, 甚雨にして洪水溢れ……下谷浅草の内, 低き所は軒端水<sup>のきば</sup>にひたる」。喜多川信節の補注に「昔江戸に鯪魚といふ魚なかりしが, 享保十三年九月二日, 江戸に大水出で, 此の魚長さ二尺計りなるもの多く, すなどり[漁]するをのこ[男]此れを捕へしを, みな人見て怪しめり。それより後, 江戸近き川々に, 常にこれあることとなりぬとかや」

このほか, 管見に入った記事は――

- 『評判竜の美野子』、泉山坊・梁鶴洲作、宝暦7年(1757)序、宝暦13年(1763)1月刊：役者評判記の形式を借りた戯作(注3)

「なまづ 廿六年以前、常陸下総の旅芝居より江戸の座へひょいと出られ、初めは誰とり上るものも無く売れかねましたが、日にましてひいき強く……、煮売酒屋、辻々にて焼売は鰻まさりとの評判」(仮名の一部を漢字・現代表記に変えた)。

序の宝暦7年から26年前は享保16年(1731)頃で、上記台風が来襲した3年後に当たり、そのあいだにナマズが増えたと考えれば、ちょうど時期が一致する。

- 『物類称呼』、越谷吾山、安永4年(1775)1月刊

「ぎぎ 享保十三年戊申ノ秋、東国所々洪水せしころより、此魚うせたり。しかふして後、鯰と云魚、東国に生ず」：「ぎぎ」はいまのギバチかと思われるが、他文献には見えない。

- 『譚海』、津村正恭、寛政7年(1795)自跋

「両国川〔隅田川〕になまづの出来たる事は、近き頃よりの事也。上州の方の何とやらんいふ沼になまづ多ありしに、いつの年か水いでて此ぬまを押しながし、川とひとつに成しより、なまづ流来り、両国川へ出来たる事になりし……」

このように大同小異の記事が多いので、享保13年以前は江戸の周辺でナマズが見られなかったのは、事実と判断してよいだろう。箱根から東にナマズがまったく棲んでいなかったとは思えないが、少なかったに違いない。それを裏付けるのは、享保20年～元文3年(1735～38)に行なわれた産物調査である。その報告書『享保元文産物帳』によると、関東では水戸、下野、下総の産物帳にはナマズが含まれるが、東北地方の庄内、米沢、三春の産物帳には載っていない(注4)。その水戸や下総などでも元来は生息していなかったか、非常に少なかったのであろう、放流を行なった記録がある――

まず、水戸藩については、第2代藩主、徳川光圀(1628～1700)の事跡を記した『桃源遺事』に挙げられている「此の国へ御うつし被成候」動植物のなかに、ナマズがある。また、岡村良道著『寓意草』には「ナマヅ……関の東には無き魚也。享保の初め、中川といふ河へ十六放ち給ひければ……」という(平仮名の一部を漢字化した：中川は旧利根川の下流)。

こうして関東地方では、移植も行なわれていた所へ享保13年(1728)の大洪水が襲来し、上の『譚海』に記されているように、限られた地域にのみ生息していたナマズが流されて分布を広げたのであろう。それからしばらく後、18世紀中頃には、『評判竜の美野子』にあるように、江戸でも珍しくない魚となったようである。

(注1) 本来漢土でナマズを意味する字は「鮎」であった。ところが、日本で「鮎」をアユに誤用してしまったので、国字「鯰」を作ったり、「鯪」を充てたりするにいたった。

(注2) 『日東魚譜』は、享保4年(1719)、同16年(1731)、享保21年(1736)、元文6年(1741)序本の4種類があり、それぞれ所収品数も注記の内容も違うが、このナマズの記事は享保16年本には載っていない。

(注3) 『万物滑稽合戦記』(続帝国文庫32編、博文館、1901年)に所収。

(注4) 松森胤保著『両羽魚類図譜』(明治18年=1885序)には、「真鯰種……鯰ハ元来庄内ニ有ラザルモノナリシガ、天保ノ末頃ヨリ始マリテ近頃到ル処ニ多ニ至リシガ、昨今年ニ至テ亦稀少ニ就ガ如シ」とある。胤保は庄内藩士で、鶴岡に住んでいた。

## 6 『大島筆記』：18世紀中葉の琉球聞き書

宝暦12年(1762)、那覇から薩摩へ向けて出港した琉球船が途中で風に流され、同年の7月21日に土佐国幡多郡大島(高知県南西端、現宿毛市)に漂着した。このとき、土佐藩の戸部良熙が編集した琉球についての聞き書が本書である(注1)。したがって、書名の「大島」は土佐の大島、記録されているのは琉球の話である。その「諸産物大様」と「雑話」に琉球の動植物のことが記されており、18世紀初頭に著された『中山伝信録』(注2)とはまた違った趣があるので、以下、めばしい記事を挙げておく。「雑話」3件以外は、「諸産物大様」からの引用であり、〈 〉内は原ルビ、[ ]内と「:」以降の文は磯野の注記である。

### (1) 産物

- 「芭蕉、諸所夥シクアリ。手入ヲシ、芋ニ仕成織ル。朝服ナドモ芭蕉布也。名産ノ第一也」:  
「芋」は樹皮の繊維で作った糸。
- 「紙、漉者ナシ。[中山] 伝信録ニ繭紙ヲ琉球ノ名産トスト云ヘル [モ] ……繭紙、決シテ琉球ヨリ出ズ。[清ノ] 福州ニテ調ル由云リ」
- 「蠟、夥シク出ス、上品也」
- 「鮫・鼈甲、琉球ヨリ出ズ、皆本唐 [清] ヨリ渡ル」:「鮫」は刀の鞘を巻く「鮫皮」、じつはエイの皮か。
- 「青貝細工、極テ精巧也。貝ハ屋久貝 [夜光貝]、石決明、両品ヲ用ユ」

### (2) 草木

- 「梯沽〈テゴ〉、太平山ヨリ出。木高サ十余丈、花木筆ノ如クニシテ、赤色也。此葉ヲ染物ヤ灰汁ニ使フ也」:梯沽はいまのデイコ。
- 「アダネ [アダゲ]、海浜ニ有。薄ノ如ニシテ、廻リ大ク、花白ク、実ボンデン瓜ノ如ニシテ六角也。垣ニモスル也」
- 「九年母多シ」, 「柿、梨ナシ」, 「人参ナシ」:「人参」は朝鮮人参。
- 「桜ハ、薩摩ヨリモ来リ、八重山ヨリモ来ル。国ニ有来ハ緋桜・二色桜也。二色桜トハ、紅ト白ト交リ咲也。トカク土地ニ不応ト見エ、快ク満盛ニハナラヌ也」(雑話上)

### (3) 鳥獸など

- 「狐居ラズ、狸アリ」:いま、タヌキは琉球には生息しないというのが……。
- 「豕、羊多シ。綿羊モ五六匹、本唐ヨリ渡リ居ル。羊ハ青葉ヲ殊【ノ】外アラシ食フユヘ、島アラシ、嶋カラシナド云」:この「羊」はヤギかもしれない。
- 「熊、猿居ラズ。猿ハ、薩摩ヨリ取寄タルガ、タマタマ居ル也」
- 「鶴、鴈居ラズ」, 「子規 [ホトトギス] 居ラズ」
- 「鷹、日本ノ方ヨリ渡ル也」, 「鴨、鴛鴦渡ル也」, 「燕、渡ル也」

- 「雀，至テ小く，奇麗也。ヨモ鳥トモ云。本唐ニテモ，琉球雀ハ珍ガル事也」
- 「鯨，取ラズ」
- 「海馬，珍シキ物也。丸サ〔胴〕ノマワリ五尺許<sup>バカリ</sup>，長サ二間計<sup>バカリ</sup>。鱗ナク，大ナル鰭モ無シ。頭ハ馬ノ如ク，口ハ豕<sup>ブク</sup>ノ如シ。……爰許<sup>ココモト</sup>ニテ云海馬モ有り，タツノオトシゴトモ云」：最初の「海馬」はジュゴン，後のそれはタツノオトシゴ。「タツノオトシゴ」の名のもっとも古い使用例の一つ。
- 「貝，数々有由。ソノ内，屋久貝〔夜光貝〕，アサ貝〔シャコガイ〕，フツメキナド，塩漬ニシテ，常ニ食ス。屋久貝ハ螺<sup>ラデン</sup>，アサ貝ハ硬<sup>シヤコ</sup>礫ナル由，伝信録ニアリ。フツメキハ，ゴウナ〔ヤドカリ〕ノ如シ」：フツメキが何か不明だが，大型の海産ヤドカリか，オカヤドカリの類，あるいはシャコだろうか。
- 「蛸<sup>シジミ</sup>貝，無シ。御餐ノ節，四万十川ノ蛸ヲ出サレシヲ尋ネ，蛸ナル由ヲ聞，コレハ国許ニテ貝寄ノ歌ヲ見シニ，蛸ジヤウニ拾ヒテ家ツトニセント有テ，其貝如何ナルヲ知ラザリシニ，始テ見，扱<sup>サテ</sup>々珍シ，国許ニテ前方不審セシ者共ヘヨキ家土産ニスベキヨシニテ，其殻ヲ数々持帰レリ」
- 「琉国ニテ鴨ナド取ルニハ，泥水〈ダブ〉ヘ着ク時分，ソノ辺ノ地ニ鳥帽子屋<sup>エボシ</sup>ヲ両方ヘ立，ソレヲ鳥ニ見馴レサスル也。鳥帽子屋トハ，直ニ土ヨリ屋根ヲ成セリ<sup>ソレ</sup>。夫ヲ見馴ルト鴨ガ其辺マデハ皆来ル也。ソノ時分，両方ノ鳥帽子屋ヘ人ヲ入レ，網ヲ両方ヘ引張テ置テ，食〈ハン〉デ来ル所ヲトント打カブセテ取ル也。又，鳥モチヲ付タルハゴ<sup>ハゴ</sup>ニテモ取也」(雑話上)：ハゴ獵は枝や縄に鳥モチを塗っておいて，鳥を捕える方法。
- 「鹿狩ハ弓ヲ用ユ」(雑話上)：いま沖縄には，慶良間列島ヘ江戸時代に移入されたケラマジカ(注3)しか生息しないが，以前はほかにも鹿がいたという(注4)。

(注1) 国会図書館蔵，請求記号 131-5，1冊，筆写本：土佐藩校旧蔵書。

(注2) 『中山伝信録』は，享保4年(1719)に清から琉球へ派遣された冊封使副使の徐葆光の著作。「中山」は琉球の別称。冊封使が残した報告書のうちでもっとも優れているといわれ，動植物にも詳しい。享保6年に清で刊行され，明和3年(1766)には和刻本も出て，広く読まれた。この本には，鹿も猿もいると記されている(→注4)。

(注3) 琉球王府編『琉球国由来記』(1713)によると，薩摩から慶良間列島にシカを移入したのは1628～44年のあいだであった。

(注4) 『中山伝信録』に「獸ニ牛・馬・羊・豕<sup>ブク</sup>・犬・猫・鹿・猿<sup>イノシシ</sup>・山猪有り」，約40年後の冊封使副使周煌が記した『琉球国志略』(1757)には，「鹿<sup>クダカ</sup>，姑達佳<sup>ケラマ</sup>・西馬齒<sup>グルマ</sup>・魚螺山<sup>カバシマ</sup>・姑巴迅麻山ニ皆有リ」(いずれも読み下し。振仮名は下記文献による)とある。現在ではシカの化石も発掘されており，鹿がかつて生息していたことは疑いなく，渡嘉敷島に多かったらしい(岡田弥一郎，沖縄島の概況，『琉球列島之動物相』，第一輯，日本生物地理学会，1940年：沖縄産動物の記載・研究の歴史について詳しい)。

## 7 『百鳥房之記』：鳥屋の覚え書

東京国立博物館に、『百鳥房之記』（と7552、1冊）と題する禽類書がある。『国書総目録』には、東博本以外の存在は記されておらず、本書（おそらく原本）だけが知られている。巻頭に「百鳥房之記」の内題があるが、著者名も作成年も記載されていない。短い前書きはあるが、改まった序や跋文は無く、鳥屋の自家用覚え書ではないかと思われる。

所収されているのは154品で、その多くが海外からの輸入品。それぞれに、価格・出所・形状・餌の種類などを記す。価格は買値か売値か不明。出所は、蘭船による輸入か、唐船持ち込みか、薩摩経由で入手した琉球産かなどである。餌については、まき餌、すり餌など、簡単な記述だけ。35品の略図が付されているが、粗雑で参考にはならない。

「大紫・黄尾」というインコについての一例を挙げる——

- 「大紫・黄尾、尾先半分黄、まきゑ。六十金、極上々、大さ隼の弟〔ハヤブサの雄か〕ほどより大きく、むねより上へかけて惣緋、背とびいろ、ゑもち〔胸のことらしい〕より下むらさき、はし〔嘴〕とあし〔足〕くろ、朱はしハなし。至てまれ也」

「大紫」は現和名オオハナインコの雌（注1）。この例では出所が記されていないが、『唐蘭船持渡鳥獸之図』（注2）所収の「大紫音呼」は文化10年（1813）に蘭船が持ち込んでいる。

「六十金」は60両で、インコ類には高価格の品が多い——「緋音呼六十、大紫黄尾六十、大紫五十、小紫五十、大花五十、五色インコ五十、緋インコ四十、バタン四十、極小形だるま四十、尾長本音呼二十五、頭黒二十五、朱はしダルマ十三」。インコ以外では、「丹頂七十、青鶏〔セイケイ〕五十、キウクワン〔九官鳥〕二十、ジャガタラ鶉二十、袖黒鶴十両、白鶴五両、真鶴四両、南京鳩四両、八色つぐみ〔ヤイロチョウ〕三両、朝鮮むく鳥二両、石見せきれい二両、琉球海和尚〔ルリカケス?〕二両、南京うづら〔ミフウズラ〕二両、緋くいな壱両二分、四十雀雁壱両二分……」と、インコより安いものが多いが、それでも庶民には手が出ない値段である。

価格以外にも、参考になる記述が見られる。次にその種の事例を挙げる（餌は省略）。

- 「極小形だるま、四十〔両〕、大サ白鳩より小形、惣もえぎ、紅はし。文化九年〔1812〕オランダ船持渡、長崎高木作右衛門御鷹方内藤才助方にて死。だるま、第一也」：ダルマインコ（眼の先と顔下部の黒帯から、この名がある）は早くから持ち込まれていたが、40～50cmと大形のインコである。この「極小形だるま」は鳩より小さいというので、ホオグロイチジクではないか（注3）。全長12cmくらいで、頬の黒く大きな斑がダルマインコのヒゲに見える。いままで、江戸時代の渡来例は知られていない。なお、高木家はこの頃長崎代官で、御用物役を兼ねており、持ち渡られる珍奇な鳥獸はその屋敷で飼育されていたらしい。また、文化9年には蘭船が来ていないので、その点は誤りである。
- 「さとう鳥、唐方〔清船持ち渡り〕、惣身もえぎ〔萌黄〕、かしら紺の丸あり〔頭上に紺色の丸い斑がある〕。むね、紅の丸あり。鉄はし〔嘴が黒灰色〕。大サ、文鳥の小形也。雌、むねの紅なし」：これはサトウチョウ、砂糖を好むのでこの名がついた。もっぱら清船が持ち込んでいたが、蘭船は次項の近縁種をおもに扱っていたらしい。



- 「沙糖鳥，上々，ラン [蘭船持ち渡り]。常のさとうより五両かたも高也。惣身もへぎ，朱はし，少し大形。頭紅毛，紺ナシ。又は羽裏紅，両わき大花 [オオハナインコ]のごとく紅毛あるもあり。雌ハ頭に紅なし」：これは嘴が朱色のシュバシサトウチョウの類で，「少し大形」とあるように，サトウチョウが全長13cmくらいなのに対し，シュバシサトウチョウは15cmほど。別の個所に次の記述がある——「さとう鳥……近頃はオランダよりも唐方多し。オランダは紅のいろよく，冬になりて嘴へける [意味不明]。唐方はいろわるく，沢山渡る。唐方は鉄はし小形，オランダ口は朱はし大型。今は唐方斗わたる」
- 「青鶏，唐方，五十 [両]，大サ，孔雀八九月のひなほどあり。日本小ばん [パン]のごとく，惣身黒く，群青の光り，金色まじり……」：セイケイはクイナの仲間で，日本には生息しない。江戸時代に時々持ち渡られたというが，記録は多くない。なお，クジャクは国内での繁殖が盛んだっらしく，八九月とか三才というように，雛や若鶏が大きさの比較によく用いられている。
- 「カワブス鳥，ラン [蘭]，十五 [両]，のじこ毛，カナアリの形チ也。これによつて，先年極黄カナアリ始て出たるとき，江戸いせや吉兵衛，カワブスカナアリヤと名づけたり」
- 「朝せん熊けら，嶋もの，五両より十両，見事。大サ，常けら二羽かけ，惣身くろ，紅はし」：「嶋もの」は何処かの島の産というのではなく，「外来の」とか「稀な」の意味で用いられた。「朝鮮」も必ずしも朝鮮産を示すわけではなく，単に「外国産」を指すことが多い。ともあれ，形状の記述から，これはクマゲラらしい。クマゲラは東北地方北部から北海道に生息するが，朝鮮にも産する。嘴は黄白色なので，「紅はし」は「頭上紅」の間違いか。クマゲラは全身真黒，体長45cmほどの大型のキツツキで，「常けら二羽かけ」，つまり普通のアカゲラなど（全長23cmほど）の約2倍と，記述によく一致する。このような鳥も売買されていたとわかる。
- 「嶋ふくろ，二両，白猫鳥ともいふ。大さ大鷹より格別大形，金眼ニして毛いろ大鷹とやもの【の】ごとく，頭よりむね惣体しろく，前より見れば白きふくろともみゆる也。白猫のすわりたる様也。ふくろの内上々品。尤，羽根至て重宝になる。日本いづ方よりも出れども，元来松前口蝦夷ものなり」：見出しの品名は「シマフクロウ」だが，記述によるとシロフクロウらしい。江戸時代にはシマフクロウとシロフクロウがしばしば混同されていたので，絵図や詳しい記述を欠く場合には，名称で断定するのは危ない。それをはっきりと示す例である。

\* \* \* \*

以上に数例を示したが，注記がほとんど無い場合も多い。それも含めて，まとめると——

- ①扱われている品数は，計154品である。
- ②うち，約3分の2は海外産。
- ③価格を示すのは111品。
- ④蘭船持ち渡り，清船持ち渡り，国内産など，出所を明記しているのは約2割である。
- ⑤筆者名と作成年は記されていないが，「極小形だるま」に文化9年（1812）の語句があるので，それ以降に執筆されたものである。

このように，『百鳥房之記』は海外産の鳥類を中心とした記録で，価格や出所を詳しく記すことから，かなり事情に詳しい鳥屋が筆者と考えて間違いないだろう。

江戸時代には禽類の飼育が盛んになり、海外からも多くの種類が持ち渡られた。しかし、異国の鳥について長崎での購入価格がまとまって知られているのは、宝暦6年(1756)と寛政元年(1789)の記録(注4)だけで、鳥屋での売価も個々のわずかな例(注5)が伝えられているにすぎない。その意味で本資料は貴重、有用な資料である。ただし、筆者と作成年が特定できないのを残念に思う。

- (注1) オオハナインコはニューギニア産。雄が緑、雌が赤と、体色がまったく違うので、昔はそれぞれ別種とされた。現種名はオオハナインコだが、雌はオオムラサキインコとも呼ばれる。
- (注2) 『唐蘭船持渡鳥獸之図』は慶應義塾図書館蔵。→磯野直秀+内田康夫編・解説、『舶来鳥獸図誌：唐蘭船持渡鳥獸之図と外国産鳥之図』、八坂書房、1992年。
- (注3) 黒田長礼、『世界のオウムとインコの図鑑』、講談社、1975年。他のインコについても、本書を参照。
- (注4) 宝暦6年の記録は『華蛮交易治聞記』(編者不明、1795序)に所収。→磯野直秀、日本博物学史覚え書VI、慶應義塾大学日吉紀要・自然科学、24号、1998年。寛政元年の記録は『寛政元酉歳紅毛直組帳』(神戸市立博物館蔵)。注2文献の解説を参照。
- (注5) 磯野直秀、『日本博物誌年表』、平凡社、2002年。その事項索引「渡来鳥獸の価格」、および注2文献の解説を参照。